■基調講演

「あらゆる制限を超えて 75 億人をつなぐ挑戦」
～一企業に閉じない、グローバルでチャレンジングな共創～

日　時：11/ 9 （金）13:30-14:30
会　場：日本科学未来館　7 階 未来館ホール
出展者：科学技術振興機構

登壇者

津田 佳明（ANAホールディングス株式会社 デジタル・デザイン・ラボ　チーフ・ディレクター）
深堀 昂／梶谷 ケビン（ANAホールディングス株式会社 デジタル・デザイン・ラボ アバター・プログラム・ディレクター）

ANAによる全く新しい発想での新たな市場・需要の創出にむけた挑戦、その一環として推進されるAvatarプロジェクト、そして米国の非営利団体X Prize Foundationと組んだANA Avatar X Prizeについて、ANAデジタル・デザイン・ラボの方々３名による基調講演がありました。会場からは、Avatarの用途や普及に要する期間について質問がありました。登壇者の主要メッセージは下記の通りでした。

●主なメッセージ

◆ANAはヘリコプターを２機保有するベンチャー企業としてスタートした歴史があります。自らのかたちを自ら革新して今日まで成長してきました。社内に「ANA Digital Design Lab」を設立し、経営理念「世界をつなぐ心の翼」を胸に、多様なメンバーが、自由な発想でテーマをつくり、その実現に取り組んでいます。（津田佳明さん）

◆Avatarとは、未来の「移動」手段です。時間・距離・文化・年齢・身体能力を問わず「移動」できる技術となります。現在、全世界の人口の６％にしか航空事業は影響を与えていません。100％すべての人に貢献し、75億人をつなぐことを、Avatarプロジェクトの目的としています。（梶谷ケビンさん）

◆ANA Avatar X Prizeとは、グローバルな賞金レースです。昨年からレースのテーマを考えるコンペが始まり、その中でANA Avatarプロジェクトが採用されました。当初はテレポーテーションのアイデアを提案していましたが、５～10年での実現可能性に鑑み現在のAvatarとなりました。人が行けない所へ行けるようになり、専門家の技術を真に求めている人へ時空を超えて提供できるようになります。（深堀昂さん）

◆悪用されることがないよう、ルールづくりを行うことは必要です。地域・国・文化をまたいでAvatarが使われるためには、社会の中で運用するためのルールづくりは技術と共に考える必要があります。（津田さん、深堀さん）